

1. この会社が目指す姿が理解できるか

この会社は ESG（E：環境 S：社会 G：ガバナンス）を経営の中核に置き、脱炭素社会・循環型社会の実現に貢献するべく「社会課題解決型事業」の創出に励んでいる会社だと理解できる。その実現のために、基本的な枠組みとして「自社の二酸化炭素を出さない・減らす」「お客様と社会の二酸化炭素を出さない・減らす」「排出された二酸化炭素をためる・変える」の3つを設定して事業を展開していることがわかる。SDGsの達成にも力を入れており、特に、9・11の「インフラ整備」、7・13の「脱炭素社会の実現」、12の「資源循環型社会の実現」に力を入れていることがわかる。また、「古河電工グループ ビジョン 2030」や「古河電工グループ 環境ビジョン 2050」を作成するなど、中長期的なビジョンを明確にしてから具体的な事業に取り組んでいることがわかる。

2. この会社の競争優位性が理解できるか

この会社の得意分野として「メタル」「ポリマー」「高周波」「フォトニクス」の4つが挙げられており、その技術力の高さは世界的にも注目されていることがわかる。これらの技術を駆使して、ほかの企業とパートナーシップを結んで新たな技術を生み出すなど、競争優位性を保ちながら新たな事業を展開していると理解できる。特に、再生可能エネルギーの活用を可能にする「バイポーラ型蓄電池」の開発は大きな成果である。子会社である古河電池の電池技術と自社の技術を融合させて開発したこの電池は、再生可能エネルギーにより発電した電力の安定供給を可能にし、この会社が将来的な目標とする脱炭素社会・循環型社会の実現に大きく貢献するかもしれない。

3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

コロナ禍の影響によりどのセグメントを見ても営業利益率が大幅に悪化しているため、事業展開の方針の見直しをしないと将来的に競争優位性を失う危険性があるとわかる。特に、情報通信ソリューション部門は危機的で、2016年には8.4%あった営業利益率が2020年にはマイナスになってしまっている。もちろんこの会社もこの状況は理解しており、その対策として経費を抑えながらも見込みのある事業には設備投資や研究開発費の扶助をきちんと行い、「攻め」と「守り」のバランスをとることを重要視している。この

バランスをうまく取ることができれば競争優位性を持続させることは可能だと考えられる。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

達成できると思う。この会社は新しい経営指標として「投下資本利益率」と「投下資本付加価値」の導入を検討しており、従業員に「一人一人がキャッシュ創出にこだわる」というマインドを強く持たせようと試みている。このような環境下で仕事をすれば、意識的に自身のスキルを向上させようとするだろうし、周りも同じマインドを持っているので切磋琢磨できると思う。また、様々なセグメントを有する会社なので、系統の違う仕事を経験できれば自分の可能性をさらに広げられると思う。

5. 報告書にはどのような改善余地があるか

抽象的な内容から徐々に具体的になっていく流れは読みやすかったが、その過程で何度も同じような内容が書かれており、もう少しコンパクトにすることが可能だと感じた。また、図やグラフを多用しており視覚的にわかりやすかったが、一方で文字ばかりのページも数枚あったので、もう少しバランスを考えた方がいいと思った。具体的な内容について述べると、経営の中核に据えている ESG のうち E の「環境」については具体的な対策について SDGs と絡めながら詳細に説明されていたので理解しやすかったが、S の「社会」と G の「ガバナンス」については抽象的な説明が少しあっただけだったので、3つを中核に据えているならその比重ももう少し均等にするべきだと感じた。